

第 18 回四国水問題研究会 議事概要

日時：平成 25 年 3 月 11 日（月）15：45～17：45

場所：高松サンポート合同庁舎国土交通省四国地方整備局 13 階 1306, 07 会議室

①開会

○資料確認

事務局（整備局石井企画部長）

- ・四国水問題研究会は、平成 18 年 6 月に設立され、約 7 年間にわたって開催してきたが、今回を最後に閉会する予定である。
- ・閉会に当たり、委員の皆さまにご協力をいただきながら約 7 年間の集大成として取りまとめた最終提言書（案）について事務局から概要を説明し、その後、最終提言書（案）に対するご意見等についての意見交換を予定している。

②議事（1）第 17 回四国水問題研究会議事概要（事務局：整備局・石井企画部長）

- ・第 17 回四国水問題研究会議事概要（資料－2）は、事前に各先生方に確認いただいているので説明は割愛。

③議事（2）四国水問題研究会【最終提言書（案）】について

（報告者：整備局横山環境調整官）

- ・「(資料－2) 最終提言書（案）」について、四国水問題研究会発足の背景とその開催経緯、目次構成、ポイント等を整理したパワーポイント資料（資料－3）により概要を説明した。特に、中間とりまとめ以降新たに加わった「1. 4 東日本大震災と価値観の変化」や、提言書（案）の特徴である「4. 水を知り地域や人を結ぶために」について重点的に説明した。

【③についての意見交換等】

井原会長

- ・事務局のほうから報告のあった最終提言書（案）に対するご意見や、統一行動、共同行動等についてのご意見やアイデア等を各委員の皆さま方からぜひお願いしたい。
- ・1 つの区切りとして、最終提言書をまとめなければいけない。内容が認められれば皆さん方との協働の成果物として理解したい。まだ全て出来上がっているわけではないので、まずい表現や、これは盛り込むべき、これは削除すべき等いろいろなご意見があると思うので、遠慮なくご指摘いただければ、可能な限り配慮したい。

板東委員

- ・私たちは、「新町川を守る会」の体験を通して、「源流の森」とも長い間交流を育んできた。水を使う一人の人間として、これからも地球規模で考えなければいけない時代に入っていると感じている。「四国がひとつ」では、まだ規模が小さいと感じているぐらい。
- ・「四国の水の日（仮称）」の統一行動として例えば、ひとつの目標を掲げた碑（木のモニュメント等）をリヤカーに載せて、オリンピックの聖火のように、四国四県から、参加者（一般、小学生、町内会、NPO等誰でも）が吉野川源流に向けてリレー（1日5km程度づつでも）する等、四国のニュースになるようなイベントを行えば、話題になり、盛り上がるのではないかな。

井原会長

- ・着実に行動の証しを残していくことは大事なことなのでぜひ考慮させてほしい。
- ・サブタイトルについては、水を媒介としながらも一度ベストプラクティスである「吉野川総合開発事業」を再構築してやろうという思いで出てきたものであり、ありがたい。

木原委員

- ・私から意見を述べた部分については、ほぼ原案どおり採用していただいているので、全体を通して違和感の残るところは無い。
- ・私は、第15回研究会から参加させていただき、過去3代の（四国）支店長を引き継いで最終とりまとめに関与できたことを大変誇りに思う。
- ・四国に赴任してひと月たったところで参加したある研究会で、四国らしさとは何かを議論したことがきっかけで、「四国はひとつ」と「四国はひとつひとつ」という言葉を使い分けていることが分かった。これをどのように形にしていくのが、これまで常に考えてきたことの1つ。
- ・今回、研究会の終盤で、吉野川総合開発がまさに「四国はひとつ」の良い事例であり、一方、「四国はひとつひとつ」は多様性という本来評価されるべきものが災いして阻害要因になっており、それを克服することにより、地域活性化に向けた新たな局面が開けていくのではないかなという趣旨が、最終提言書の骨格になる形で展開されたことについては、大変ありがたく感謝している。

七戸委員

- ・字が詰まっていて、フォントも小さく読みにくい。広報するのであれば（費用の問題があるのかもしれないが）もう少し字の間隔を空けて、なるべくフォントも大きくし、読みやすくした方が良い。
- ・P8とP22に同じ早明浦ダムの写真が使われているが、このような載せ方は避けた方が良い。
- ・P23の未利用水の取り扱いの記述はこの表現で良いのか。徳島県のためにならないのではないかな。（同：望月委員）
- ・P29等の「気象変動」は「気候変動」に統一した方が良いのではないかな。
- ・P29の「流域経営」はマネジメントの意味であれば「流域管理」ではないかな。

望月委員

- ・「1）吉野川総合開発以前の状況」と「2）吉野川総合開発の状況」が事実とし

て書かれているが、吉野川総合開発の目的や期待される効果が書かれていないのではないか。

- ・P22の「Yoshinogawa News」には、偶然に助けられたという事実のみを書いているが、我々のスタンスとして、もう少し文章が工夫できないか。
- ・P24「(4) 水源地域に対する理解」、P25「3. 3 環境との関わり」について、自慢できる素晴らしい水環境を次世代に残したい、という観点で充実できないか。

池田委員

- ・「起」「承」「転」「結」の構成になっているが、研究会発足の背景や、この7年間で変わってきたこと（社会状況や価値観の変化、気候変動）を最初に取り上げ、だからこそ、利害を超えて合意形成しながらひとつになる必要がある、という次世代に分かるようなストーリーをつくっていきける構成にならないか。
- ・提言書は誰に向けて発信するのかが分からない。問題提起としての「四国はひとつ」の意義と、最後の「水を通してひとつになる」ことが一貫したストーリーになっていれば良かったと感じた。

井原会長

- ・もっともなご指摘で、この提言書を出してこれで終わりではない。これをベースとしてどう活用していくのが重要。
- ・もっと分かりやすくして子どもさんに対してもの的確で正確な情報を提供したり、大学で必読の書にする等、いろいろな活用の仕方やアプローチがあると思うので、遠慮なく前向きな話をしていただきたい。

那須委員

- ・「情報の共有」について、多様な価値観や多様な便益があるということ共有した上で合意形成が図ることが大事だということ、先程（研究会の前に開催された一般公開シンポジウム“四国の水問題と気候変動を考える～水危機を克服する社会とは～”）教えていただいた。
- ・最終提言書の今後の利活用については、提言書を必読書にするというのも1つだと思うが、具体的な行動が重要なので、フォローアップの枠組みのようなものが提案されると良いのではないか。7年間も水問題を語った希少な会なのでぜひ大切に活用されて欲しい。

端野委員

- ・まず、本当に熱心にこの提言書をまとめることにご尽力された皆様方にお礼を申し上げます。
- ・提言書の内容からは少し外れるかもしれないが、吉野川の治水計画では、上流ダム群により6,000m³/sをカットする計画になっており、早明浦ダムをはじめとした現状のダム群でカットできるのは半分の3,000m³/sであり、残りの3,000m³/sをカットする施設は具体化できずに現在に至っている。利水計画も同様である。このように早明浦ダムは当初の計画とは違う状態になっているので、ダムの計画自体（治水、利水計画、容量配分）を見直しても良いのではないか。提言書には書きづらいのでこのままで結構だが。
- ・「水源地域」のエリアについて誤解が無いように、早明浦ダム上流ではなく、「池

田ダム上流」であるということをはっきり示してほしい。一般の方はどうしても早明浦ダム上流をイメージしてしまう。

井原会長

- ・できるだけ専門用語やテクニカルタームは避けながら、本当に正しく地域住民に分かってもらうような働き掛けが必要であり、この報告書が出た後でも、委員の皆様方のフォローアップ等は続けていく所存ですので、今後ともよろしくお願ひしたい。

三井委員

- ・第十堰の建設については、過去に反対運動が起こり、推進派が署名を行ったところ、(徳島県の)人口が70何万の中で30万人の署名が集まったといういきさつがある。これは一般の人が考えているほど徳島県民全体が反対したのではない。どうもマスコミへの対応の仕方が悪かったからだという感じを受けている。
- ・内務省時代から、低平地の固定堰は非常に危険だといわれており、それが第十堰である。第十堰と書かなくても良いが、洪水の疎通能力の向上について触れておいた方が良い。
- ・銅山川ダム群(富郷、柳瀬、新宮)は工業、発電開発に貢献する開発の優等生だと思っている。銅山川の濁水は工業生産への影響が大きいことから、銅山川の濁水についても触れて欲しい。
- ・早明浦ダムの操作について、書き足りないのではないか。徳島県の方に聞いてみて欲しい。

井原会長

- ・ダム操作やダム操作規則の話はずっと出てきているので、やはり正しく知ってもらう必要があることは書くべきだろう。
- ・提言書だけで全て知るのではなく、最小限の記載にとどめながら、具体的にどういう行動を起こしていくのか、そのためのよって立つべき事実はどうか、という形でフィードバックさせ、できるだけ三井先生の意向は尊重して生かしていきたい。

三木委員

- ・“水でつながる「四国はひとつ」”というのはいいいタイトルだと思う。
- ・この研究会は、「四国はひとつ」という大きな話の中で水問題を考えていくということからスタートした。吉野川総合開発で一旦「四国はひとつ」が実現したがその後、濁水や洪水、また気候変動の問題も加わって、もう一度水というものについて皆さんが考えるようになり、同時に、「四国はひとつ」というものをもう一度見つめ直すときがきた、という大きな流れになっているが、非常に読みやすく、貴重な文章になると思う。
- ・提言書をうまく使って、「四国はひとつ」、それから水問題の解決ということにつなげていくべきだと思う。

大年委員

- ・「環境」について、水質だけの記述になっているが、やはり河川環境の観点からは、植生や生態系の生物環境のキーワードもぜひ盛り込んでいただきたい。

- ・P3の「日本の降水量の経年変化」に降雨の変動の幅が非常に大きくなっていることが示されている。変動幅が一定で推移しているのであれば、それまでのやり方を踏襲すれば対応できるが、変動幅が拡大した結果としての極端な現象に対しては、これまでのやり方ではなく、上下流の関係者がまとまって総力戦で利害を超えてひとつにならないと対応できない、故に「四国はひとつ」になって対応することが求められている、という論理展開を最後に加えていただければじっくりくるのではないか。

木下委員

- ・これまで話した意見は反映していただいているので結構かと思う。
- ・想定できる最大規模の洪水、渇水についても対応していく必要がある旨が記述されているが、今後は、具体的な目標数値の検討を進めて欲しい。
- ・同じく、第十堰についても、実質的な調査・検討を進めて欲しい。
- ・P2の「四国における水害被害額」は「人口当たり」等の修飾語を追加してほしい。
- ・「おわりに」に記述すればよいと思うが、「四国はひとつ」について、水に関する利害対立が「四国はひとつひとつ」になってしまったのだと思うが、実は水の話だけでなく、物理的な距離感（東京～名古屋が1時間半で移動できるのに四国内で隣の県まで2～3時間以上かかる）も「四国はひとつひとつ」の原因のひとつであると思っている。国土強靱化の観点から道路のネットワークは必要であることから、道路や新幹線等、交通の話も少し入れた方がよいのではないか。
- ・あわせて施設の老朽化に対するメンテナンス（長寿命化）が課題であることにも触れた方がよいのではないか。

七戸委員

- ・木下先生、三井先生は、第十堰に関しては、P9の“「抜本的な第十堰の対策のあり方」による調査・検討を進める必要があります。”という書きぶりでは足りないとお考えですか。

木下委員

- ・書くだけではなく、実質的に検討を進めてもらいたいという意味。

鈴木委員

- ・最初から参加させていただいているが、井原先生の指導力と事務局のご努力で非常に立派なものできたと感じている。私がお願いしたことは修正されており、この提言書には満足している。
- ・池田委員がおっしゃった、「誰が読むのか」がポイントだと思う。いろいろな使い方があろうと思うが、河川工学を勉強する人はこれを読めば、河川の問題や役割、社会との関わり等が一目で分かるので、生きた教材として非常に重要で貴重な資料だと思う。流出解析や基本高水などの技術論は含まれていないが、これを読めば技術論も学生が勉強する気になるだろうし、一般の方にもこれを読んでいただければ、河川というものの本質を理解していただけるだろう。
- ・研究会とこの成果に非常に感謝している。

井原会長

- ・次の高橋委員にお願いしたいのは、「報道機関との連携」について、やはりマスク等を取り上げ方も非常に大切なので、何か問題提起等があれば、ぜひご発言をお願いしたい。

高橋委員

- ・報道機関としてのお願いとして、タイトルが、“水でつながる「四国はひとつ」というどちらかというと小説的で少し軟らかな感じなので、ぜひ「はじめに」の部分に、なぜ、この研究会が発足したか、立ち位置（誰に向けて発信するのか）等を分かりやすくはっきり書いた方が良いのではないかと。全体を読めば何となく分かるのではなく、そういうことを冒頭に端的に最初に書いてもらえた方が原稿も書きやすい。
- ・「東南海・南海」という表現は防災学者の間では最近使わないようになっており、「南海トラフの巨大地震」等の表現に修正した方が良いのではないかと。

七戸委員

- ・表紙について、タイトル“水でつながる「四国はひとつ」”の他に、「四国水問題研究会最終提言書」は付けるのか？
- ・表紙は「最終提言書」となっているが、「はじめに」では「この報告書」と表現している。

井原会長

- ・中間報告は現状を知ったところでまとめているが、今回は、全体を通して最終的な行動の指針に役立つようにまとめたもので、7年間を通じた最後の1つだろうと思っている。そこで表紙に「最終提言書」って出すべきかどうかは気になっており、今のご指摘についてはまだ詰め切れてない。ご意見があればお寄せいただきたいお。
- ・「最終提言書」という名前を出すよりも、“水でつながる「四国はひとつ」”の方がねらいがはっきりするだろう。なぜこういうものを出すのか、目的は、「はじめに」に記載する必要がある。

七戸委員

- ・報道して頂くのなら、『・・・四国水問題研究会が“水でつながる「四国はひとつ”という雑誌を発行しました。』では分からない？

高橋委員

- ・先程、「はじめに」に盛り込んで欲しいと言ったのは、例えば「こういう大きな課題があって、それを解決するためにはいろいろな対策を打たなければいけないが、端緒として、提言としては、水問題を四国全体で解決するために統一行動を設けるなど、四国はひとつになる必要がある・・・ので提言書をまとめました。」など、具体的にいうと報道機関的にはニュースの見出しになるようなイメージ。

梅原委員

- ・既に話がでていますが、平成 17 年の大渇水以降、やはり水問題を解決するには四国がひとつにならねばならない、水問題が解決すれば、四国はひとつになる、というのが研究会の発足の経緯であった。
- ・その後、今日まで、気候変動の問題や、3.11 東日本大震災、社会情勢の変化等が

あったが、四国にとって水問題が最大の問題であることは変わらない。

- ・タイトル“水でつながる「四国はひとつ」”は、「四国はひとつ」の問題がぶれずにずっと議論されたという意味では良いが、非常に耳障りが良過ぎるために、ある面ではメッセージ性が弱いのではないか。
- ・私たちにとって、四国の水問題だけではなく、次世代にどのようにメッセージを送るかということが大変大きな問題である。提言書（原案）のタイトルは、“未来を担う子どもたちへつなぐ水”だったが、そのようなサブタイトルを入れる方がよりメッセージ性が強くなるのではないか。

井原会長

- ・タイトルについては、子どもたちに夢や希望を託すのは良いが、子どもよりも、我々がもっとしっかり頑張らないといけないのではないかという思いもあった。
- ・行動が伴うためには、水を媒介としながら我々が県域や利害の対立を越えて共同戦線を張らないといけないという思いで、木原委員からの提案を採用させて頂いた。非常に響きが良いと感じたが、響きが良過ぎて確かに（メッセージ性が）弱くなっているという面はあるので少し考えさせて欲しい

福田委員

- ・非常に良いタイトルだと思っていたが、今の議論のとおり、「未来につなぐ」「将来につなぐ水」のようなサブタイトルがあるほうがよいのか迷っている。
- ・提言書のとりまとめにあたり、最初に原案を見たときには、本当にまとまるのか心配をしていたが、先生方から非常にいい意見が出て、会長におまとめいただき評価できるものができた。
- ・今後、「4. 水を知り地域や人を結ぶために」提言を具現化し動かしていくのは行政だけでは駄目で、市民サイドが動かないとうまくいかない。提言書を実際に動かしている行政そのもののアドバイザーになったり、ある部分はエンジンになったりとエンジンをどうするかが悩ましい。まだ答えが無いがエンジンが必要ではないか。

井原会長

- ・「最終提言書」でいいのか、「四国水問題研究会」をどう出すか、等いろいろな問題が残っているが、これは検討させてほしい。
- ・共同行動について、「四国はひとつ」になるためのイベントや、それぞれの四国人が吉野川に感謝の気持ちを込めながら行ういろいろなイベント等について、お気付きの点があれば、事務局にお寄せいただければ、できるだけ生かしたい。
- ・これまで各委員から出された細かなご意見等は全部整理し、生かすべきかどうか検討してきたが、まだ不備な点はお認めいただき、今後ともよろしくお願ひしたい。
- ・何か最後にぜひ、四国水問題研究会の委員として、これが最後だと思ったときの水問題に対する思いや感想、主観を簡潔にご指摘いただけたらありがたい。

三井委員

- ・河川管理は国土交通省主体で、周りが手伝おうと思っても手伝えない。エンジン

はあっても、動かしにくい状態にある。そこで、エンジンとなる（毎日住民を教育しているのはマスコミなので、）マスコミとうまく付き合ってもらいたい。

- ・私は、新聞社を辞めて教授になった人がたくさんいる大学に一時在籍したことがあり、マスコミの使い方が下手だとよく言われたので。そのようなことをお伝えした。

井原会長

- ・マスコミの使い方というよりも、お互いの情報連携が必要で、本当に両方が良くなるような何かそういうこと、正しいことを、当たり前だと思うが実は大変なことだということについて、情報提供というかコンテンツの厳選に努めたい。

七戸委員

- ・福岡県の国交省OBに、「川」がでてくる小学校の校歌を集めている人がいる。同じように地方整備局や小学生が吉野川を歌った校歌を集めるのも宣伝として良いと思う。
- ・ダムに定点カメラを置き、ウェブで公開し、例えば「一晩で早明浦ダムが満水」の状況を早送り映像で見せたり、危険な堤防上にも定点カメラを置いて見せることが出来れば、宣伝として普通のウェブサイトより圧倒的に良いのではないか。ご参考までに。

井原会長

- ・川に対する思いをもう一度リフレッシュしてみることも大事。
- ・まだ言い足りないこといっぱいあるかと思うが、具体的な統一行動等、何かアイデアがあったら、ぜひお寄せ頂きたい。
- ・この最終提言書は、今後、各方面で積極的に活用、運動をしてもらいたく、ひとつの区切りとしてまとめるものである。実態に対してこの内容が入っていない、言及が足りない、ということも大事だが、むしろこれからどうするべきなのか、どういう取り組みが出来るのか、そこへ一歩踏み出すためのスタートラインとして読んで頂きたい。
- ・テクニカルチームは出来るだけ避け、今後、将来を担う若い世代を含めた幅広い世代にまで興味のあるところから読んでもらいたい。そのためにはガイド（手引書）も必要と感じている。
- ・最終提言書の提出は、あくまでも活性化を図っていくための1つのきっかけである。これだけでは不十分なので、今後の取り組み等についてもぜひ皆さん方のサポート、ご支援をお願いしたい。
- ・最後に、この最終提言書は、まだいろいろ抜け落ちている点や修正・追加すべきところもあろうかと思う。それをまたもう一度会議を開くとなると大変で、発散すると困るので、最終的な調整、採択等については、会長に一任とさせていただきたい。

④閉会

事務局（整備局・川崎局長）

- ・この研究会は、平成17年の大渇水を契機とし、水問題は四国がひとつにならな

いと解決しない、逆に、四国がひとつになるためには水問題を解決しなければならない、という認識をきっかけとしてスタートしている。

- 平成 18 年 6 月の発足から計 18 回もの開催があり、中間とりまとめ以降は、地球温暖化に対する対応や、南海トラフ地震に対する予防の考え方も取り込む等、様々な内容が加わってこの提言書がまとめられている。
- 今後は、この報告書を、四国人が共通の認識を持って行動する指針として活用させていただきたい。
- 「四国はひとつ」に向けて活性化が図られることを祈念し、皆さまのご苦勞に重ねて感謝いたしまして、あいさつとさせていただきます。長い間、どうもありがとうございました。

事務局（整備局・石井企画部長）

- これをもちまして、第 18 回の四国水問題研究会を終了させていただきます。ありがとうございました。

以 上